HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	『オツベルと象』、「多元的謎」における試論 : 新「読み」論とその思考プリズム
著者	荒木, 美智雄; Araki, Michio
引用	北海学園大学人文論集(64): 250(67)-206(111)
発行日	2018-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

3部作

『オツベルと象』、「多元的謎」における試論

――新「読み」論とその思考プリズム――

荒木　美智雄

1部　《第一日曜》賢治の錯綜する「宗教論」による「読み」のプリズム

序（『オツベルと象』における㉚の謎）

現在、北海学園大学で「教育実習実践指導Ⅰ・Ⅱ（国語教育）」という講義を週一回（1・2部）、受け持っている。講義内で、国語教育の「模擬授業」を行うに当たって、ガイダンスの意味を込めて、「模擬授業」のための「模擬的授業」を、私が披露した。たまたま、児童言語研究会編集による『オツベルと象』（宮澤賢治）の授業解説及び指導案[1]があったので、それを参考にして「模擬授業」の〈展開例〉を学生に示しめしながら、解説と授業実践を行った。

無事終了した後、私の「模擬授業」の総括を含めて、『オツベルと象』論を、改めて私は整理し直して「まとめ」をすることにした。

そこで、先ずこの作品自体の「神秘さ」に対して感動すると同時に、この童話教材の「深さ」や錯綜する「謎」について取り込まれてしまい、その「授業論」「教材論」を執筆せざるを得ない衝動に駆られた。私を魅了して止まないそれらの「謎」とは、何か。ここに整理し、掲載してみよう。

《第一日曜》《第二日曜》《第五日曜》に分けて❶～㉚の謎を、以下叙述する。

（六七）

1　『オツベルと象』における、「30の謎」

第一日曜

❶この作品の題名が「オツベルと白象」ではなく、「オツベルと象」という理由は何か。（作品の主人公は、固有名詞のオツベルか、または一般名詞たる白象か等含む）

❷最初の一行「……ある牛飼いがものがたる」は、「サブタイトル」か、本文の一行なのか。また、誰の「語り」で、「……」の意味するものは何か。

❸唯一の固有名詞「オツベル」の語源は何か。

❹なぜ「象」は《白象》なのか？　また「ペンキを塗つたのでないぜ」と《偽装》を前影化させる「仕掛け」を、作者は、なぜ意図したのか。

❺「十六（人）」「（稲扱器械）六台」「六寸（ビフテキ）」「六連発のピストル」という「六」をこれだけ意識的に使用するのは、なぜか。（この時、稲扱器械を作動させる一六名の「百姓」の意味付けとは何かを含む。）

❻「のんのんのんのんのんのん」について、「六回」も擬音語が連続して描写されるのは、なぜか。（作品の後述では、省略され「四回」の「のん」に表現される所が、二箇所あるが、その関連を含めて）

❼〈白象〉の最初のコトバが「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしの歯にあたる。」だが、「ぼく」でなく、ここだけ「わたし」という使用理由とは何か。また、「籾」をあえて「砂」と表現した理由は何か。

❽新式の稲扱器械の作業場を「塵（ちり）」と「沙漠のけむりのやうだ」記述。さらに謎❼の「砂」という描写も同様だが、これらの作者の意図とは何か。（この「砂」のパチパパチ当たる描写部分では、《第五日曜》の「ピストルの音」と重なる「謎」に繋がり、更なる「謎」の深淵が待ち受けている）

❾〈白象〉が森からこの作業場に来た理由とは、〈牛飼い〉が語るように本当に「ぶらつと」「ただなんとなく」来ただけなのか。その真意は。

❿本文中の三つの「くしやくしや」について、①《オツベルの顔》②《オツベルのつぶれ方》と、そして、山の象における③「《皺くちゃ》で灰色の顔」では、どんな共通性と差異が存在するのか。

第二日曜

⑪「時計」「鎖」「靴」「靴の飾り」の携帯を、オツベルから強要され、最初は「拒否」するが、「なかなかいいもんだ」と受け入れる〈白象〉は、悪のオツベルとの対比から、「純粋」「無垢」「（賢治の理想型）デクノボー」論の文脈だけで説明することは、可能なのか。

⑫「川から水を汲んでくれ」というオツベルの意図（仕掛け）は、作品の最終行の「おや、［一字不明］川へはいつちやいけないたら。」とどう繋がるのか。また逆に、繋がらないのか。

⑬オツベルは、〈白象〉を搾取するために懇願する時、顔の表情をしかめてという表現と同時に「両手を後ろで組んで（顔をしかめて）」「両手をかくしに突っ込んで」という同様な仕草を、なぜするのか。

⑭オツベルの房についた「赤い（帽子）」と言う表現と《第五日曜》の〈童子〉の「赤い（着物）」という同じ「赤」の表現の共通性が、あるのか、また、無いのか。

⑮〈白象〉が「月」に語りかける時、「ああ、せいせいした。サンタマリア。」「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア」と言うのは、なぜか。「月」と「サンタマリア」の関係性とは、何か。（「月」はイスラム教、「サンタマリア」はキリスト教。〈白象〉は仏教、という三大宗教が象徴化されているのか。いないのか）

第五日曜

⑯《第五日曜》の冒頭において、前回の話の続きから、聞き手は〈白象〉がその後どうなったか知りたいのに、〈牛飼い〉は、敢えては話をズラし（〈白象〉を回避しつつ）「オツベルかね」と語る、その意図（〈牛飼い〉の策略）とは何か。

⑰〈白象〉の「赤い竜の目」とは何を意味するか。《第一・二日曜》と《第五日曜》の〈白象〉では、何か変化があるのか。ある場合、「竜の目」は、どのように関係するのかなど。また、謎⑭の着物・帽子の「赤い」とどう関わるのか。関わらないのか。

⑱オツベルは、〈白象〉の「（嘆き）苦しいです。サンタマリア」という声を聞きつつ、敢えて一層「ことごとく象につらくした」という策略家である、彼の隠され

（六九）

た「真意」とは何か。

⑲白象は月に「さよならです。サンタマリア」と別れの言葉を述べたのに対して、「月」の助言が、投げやりでかつ、男コトバであり、しかも「わらって斯う云った」という「真意」は、どこにあるのか。

⑳〈白象〉は、助けを求める方法で、「声」「叫び」ではなく、敢えて「手紙」という紙（記録性に富む手段）に拘った作者の意図は、何か。（あまりにテキパキと「硯と紙」が用意されるところに作者の、特別な意図を感じるのだが）

㉑〈童子〉とは何か。また前の謎⑭で指摘した、「赤い着物の童子」が、すぐ「赤衣（しゃくえ）」に変化するのはなぜか。

㉒「山の象」の襲撃が「どいつもこいつもきちがいだ」「花火」「噴火」「グララアガア、グララアガア（六字擬音語の二連続）」と怒りの爆発表現が、「破壊」をイメージするその意図とは、何か。

㉓「山の象」の襲撃の前、オツベルが昼寝の盛りであったが、その時、垣間見たオツベルの「烏の夢」とはどんな夢だったのか。

（七〇）

㉔「山の象」の襲撃に対して、オツベルは「眼をぱつちりとあいたときは、もう何もかもわかつてゐた」と語られるが、オツベルは何を、また、どうして「わかつてゐた」のか。

㉕「山の象」の一匹が「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へ当たるんだ。」という文句について「オツベルはいつかどこかで、こんな文句をきいたやうだ」と語る意味とは、何か。（《第一日曜》の〈白象〉の台詞＝「砂がわたしの歯にあたる」との共通性からも考察する）

㉖手紙では「みんな出てきて助けてくれ」と書いたのに、山の象は「オツベルをやつつけやう」と叫び、オツベルを潰してしまう謎は、須貝千里（山梨大）氏が指摘する《「ことば」は伝わらない》という説だけで説明可能なのか。

㉗「白象はさびしくわらつてさう云つた」について「さびしく」の理由とは、何か。

㉘最後の一行「おや、［一字不明］、川へはいつちやいけ

ないたら」は、誰が誰に対し、なぜそう言ったのか。また、作品の主題との関係とは。

㉙最後の一行目にある「一字不明」は、記号なのか、または、どんな文字だったのか。その探究する方法はあるのか、ないのか。

㉚オツベルは、本当に死んだのか。本文では〈牛飼い〉も、もったいぶって「オツベルかね、そのオツベルはおれも云はうとしてたんだが」と語り終えた後で、「居なくなつたよ」と聴き手に説明する。しかも、作品では「オツベルは（拳銃の）ケースを握つたまま、もうくしやくしや潰れてゐた」としか、表現されていない。どこにも死んだとは書かれていない。「皺くちやで灰いろ」の〈山の象〉たちと、彼らに「くしやくしやに潰れてゐた」オツベルとは、どう繋がるのか。また、繋がらない単なる偶然なのか。

さらに、別作品『注文の多い料理店』の若い紳士も、最後の結末で紙くずのようになるが、どんなことをしても元に戻らないだけで死んではいない。その紳士たちと「くしやくしやに潰れてゐた」オツベルとは、紳士たちとどう関連するのか。また、関連しないのか。

さまざまな「謎」が異次元に交錯する作品『オツベルと象』であるが、多くの実践報告があり、「研究論文」も多彩で、それらを充分な検討を重ねながら、私の考える「オツベルと象」試論をこれから論じていきたい。

2　先行「研究論文」の成果と蓄積を巡って

宮澤賢治の「オツベルと象」は、大正一五年一月『月曜』に掲載された物語であり、数年前まで教育出版の『伝え合う言葉　中学国語1』にも掲載され、人気を博した教材である。

この作品論では、第一に「階級闘争的作品」であり、「資本家階級」対「労働者階級」や「労働争議」などの社会的な対立を描き出した優れた作品と評価されてきた。[2] さらに小森陽一氏などは、第一次世界大戦後の資本主義の危機、世界的な植民地独立運動のうねり、さらには、ガンジーの非暴力主義の徹底を重ねて読む「作品論」も提示しているが、これも大切な視点であろう。[3] 充分に参

（七一）

考にしたい。

第二は「無償の行為を続ける白象は〈衆生のために身を犠牲にして苦行を修め〉ようとする求道者」という「作品論」である。[4]

第三は「〈言葉〉は通じないのだ」（第三項論）という観点論じる須貝千里氏の「作品論」である。[5]

ここで、大きな比重を占め、数々の研究論文のほとんどが、「第三の立場」で論じられてきた経過がある。田中実氏と須貝千里氏が編集した数々の、「研究論文」「実践記録集」の重要な影響下にあるためであろう。その業績を充分評価しつつも、「第二の論」の立場も、大変興味深い「作品論」を含んでいると私は考える。

その中で「第二論」の立場で中心となる「研究論文」は、池上雄三氏の論考であり注目したいが、それ以上に、私が着目したのが、「第二の立場」で宮沢賢治論を発表している清水正氏の著書である。その著書は、ほとんど顧みられず、回避されてきた観が強い。なぜなのか。彼の著書を参考資料として取り上げたものは、主要な論考では、以下の二点しか、私は探せなかった。

①高橋敏夫氏の『文学の力×教材の力』（2001年）の中の「いつかどこかで、こんな文句をきいたやうだ……――『オツベルと象』論への序――」という論考である。そのなかで謎㉙の「一字不明」問題で清水正の『宮沢賢治の神秘――「オツベルと象」をめぐって』（1992年）を参考資料として提示し、「詳細かつ刺激的なものになっている」と好評価している。

②横山信幸氏もまた、「宮沢賢治『オツベルと象』と〈第三項〉」という論考で、「資料2」として月の言葉は「実は白象自身の内なる他者ではなかったのだろうか」（清水正『宮沢賢治の神秘』掲載）と取り上げ、論じているのも大変興味深い。[6]

高橋敏夫氏の、「いつかどこかでこんな文句をきいたやうだ」の問題では、私の提示した謎㉕と重なり、謎❿の「くしやくしや」論も、また、謎❻の「のんのん」の六連発の「擬音語論」も、すべて清水正氏の著書で詳細に触れていて、その根拠を参考資料として論究すべきなのに、「敢えて回避している」ように感じるのは、私だ

けであろうか。この問題を「仏教論」及び「キリスト教論」で考察することは、その意義があると思われるが、清水氏の膨大な資料に基づく詳細な「論考」に全面賛同することは、私もできない。しかし、「宮沢賢治の神秘」を語る上で、彼の功績をある程度評価し、より建設的に「教材研究」を行いたいというのが、私の考えであり、本旨の執筆理由となっている。

ではここから、《第一日曜》は1部、《第二日曜》は2部、《第五日曜》は3部とに分け、考察をするが、本稿の1部では、《第一日曜》だけの論究とする。謎の❷❶❸から始めよう。

3　《第一日曜》の謎解きから

(1)　一行目は、「サブタイトル」それとも「本文」？

最初に「謎❷」について考えたみたい。題名『オツベルと象』の下に作者の宮沢賢治、そして最初の一行、「……ある牛飼いが物語る」と始まる謎の一行についてである。これを「サブタイトル的」と捉える考え方もあるが、須貝千里氏[7]が指摘するように、「。」のない一行、また、「語る」と終止形で文が終わっていること、さらに両者の間に作者名書かれていることからも「サブタイトル」とは考えられないことは、明白だ。では、作品の「語り」であるとすると、「語り部〈牛飼い〉自身を説明するのであるから、その上のもの〈作者〉または、〈神＝天〉と言える崇高な存在のものが必要となる」と私は推測したが、どうも納得がいかない。最も大事なことは、「語り」以上にこの点線「……」の意味である。この役目とは、次の三点に集約できよう。

①「省略」②「余韻」、最後が③賢治特有の「映像的効果」を挙げたい。③については、この「……」を使った、宮沢作品を探せば、ある「ヒント」が与えられる。それは有名な詩集『春と修羅』の中の「永訣の朝」だ[8]。

銀河や太陽　気圏などとよばれたせかいの
そらからおちた雪のさいごのひとわんを……
…ふたきれのみかげせきざいに

この『春と修羅』という詩集は、「心象スケッチ」とし

（七三）

て賢治自身が発表した作品である。「スケッチ」という風景画として捉えれば、映像描写がここにある。「銀河や太陽　気圏」から落ちてきた「あめゆき（の降り方）」が「……」ともイメージされる効果と同時に、それらが「御影石材」に溜まっている一つの「風景画」を前影化させる映像となる。したがって、一つの見方としてという「条件付き」であるが、「……ある牛飼いが物語る」とは、天（神＝作者）から授けられた「物語」として捉えることも可能だと、私は考えるのだが、深読みだろうか。是非その批判を受けたい。

（2）題名「オッベルと象」に潜む「謎」

次に謎❶と❸「題名とオッベルの名」について、両者を絡めて論じたい。

謎❸の「オッベル」とは、何処から来た固有名詞なのか。当初「オッペル」と呼ばれ、後「オッベル」と改称された名前であるが、原子朗氏は『新　宮澤賢治語彙辞典』（東京書籍１９９９年）で盛岡方言に悪賢い人間をさす「オッペ」という言葉がある点、さらに十九世紀後半、日本や朝鮮で悪事を働いたドイツ商人「オッペル」をヒントにして「オッペル」と記述したという案も、一概に間違いではないという見解がある。これは、再検証すべき観点であり、大変興味深い話である。

しかし、私は、ドイツ語の「ober（英語では over・upper）」、つまり「長・大・上の意」から「地上の上位者」という意を取りたい。この説は谷川雁氏や清水正氏が主張するもので、〈牛飼い〉が、ことあるごとに盛んに持ち上げる「オッベルときたらたいしたもんだ」という台詞と重なり、彼の人物象という形象のイメージにマッチすると考えるからだ。

では、次に謎❶の題が、なぜ「白象とオッベル」でなく、「オッベルと象」となっているのかを論究してみよう。この童話作品の主人公は誰かと「対」をなす問題だ。

主人公は、「オッベル」と「白象」という両者でも良いが、題名の順番に準ずれば、明らかに先に記述した「オッベル」、しかも唯一の固有名詞が決め手となる。他は全て格下げされた「一般名詞」である故に、納得できる。〈白象〉などは、固有の名前でも良いのに、敢えて賢治は

名づけない徹底ぶりだ。

しかも、《第五日曜》のクライマックスでは、〈聴き手〉全員が、搾取される〈白象〉の結末を知りたいのに、〈牛飼い〉は「オツベルかね」と、オツベル側から強引に「語り」を始めるのは、特別な「意図」があると勘ぐってしまう、「語りの巧みさ」が、そこに隠されているだろう。

さらに重要な点は、「オツベルと白象」でも良い「題名」が、「白＝純白、無垢」を削除しつつ、「オツベルと象」と、簡潔に記述されても、何の問題も生じないのに、敢えて「象」を「白象」とした「仕掛け」とは何か。深い意味を残しつつも、ここで更なる謎の「なぜ白象なのか」を中心に探っていきたい。

（3）ゾウはなぜ唯一、〈白象〉なのか？

謎❹「なぜこの象だけが〈白象〉なのか」。〈山の象〉たちが、すべて色の付いた一般的な、かつ、普通の象に対して、この登場人物だけが〈白象〉と、表記され、純白、無垢な純粋性を備えた、特別な存在として登場する「謎」である。

この作品は〈象〉が登場する世界であり、「沙羅樹」（沙羅双樹でなく）に住み、さらに〈童子〉まで表現されていることから、「印度」「チベット」などを強烈に連想させ、仏教との深い関連性で読んでしまう蓋然性を持っている。〈白象〉は「普（あまね）く賢い菩薩（悟りを開く前の修行者）＝普賢菩薩」が乗っている〈白象〉を前影化させる。その牙は、六本あり、謎❺「六」と密接に繋がっていく。古代印度に伝わる「ジャータカ物語」[9]にも、「白象」が登場する話がある。また、普賢菩薩は、修行により悟りに至る能力を獲得しているが、現世に残り、人々を救う活動に専念しつつ、中には徳の不足からか、如来（仏）になれず、もっと衆生を救済したいと願う「菩薩」も存在するという「話」もあり、大変興味深い。

この関連で〈白象〉を「普賢菩薩」と捉えて読む「作品論」も必然的に可能であるが、「深読み」という批判は当然であろう。

ただ、〈白象〉は「ペンキを塗ったのではないぜ」と、だれもそんな邪推（滑稽さ）で捉えないのに、〈牛飼い〉があえてここで強調することで、真逆の意味をクローズ

（七五）

アップしてしまう余韻が残る。

また、その〈白象〉が最後「さびしくわらつて」でマイナス効果を演出し、題の中からも〈白象〉がただの「象」に格下げされる意味は、両者を絡めつつも、再度、検証する価値を、私は認める。

では次の謎❺の「数字〈六〉の謎」に移っていきたい。

(4)「六」の謎と擬態語「のん」六回という謎の深淵

この作品には、謎❺で取り上げた、意図的な「六」が多数使用され、謎が謎を呼ぶ。稲扱器械が、六台。百姓が十六人。ビフテキも六寸。さらに、オツベルの発射するピストルが「六連発」と続く。さすがに、オツベルを潰す象の数は、五匹と「六」を期待させながら、外す「ユーモア」はある。ほとんどの研究者が取り上げなかった問題点として、「のんのんのんのんのんのん」の「のん」が六回も連続して、意図的に使用される謎が、ここに隠されている。その後の二回の同様な使用の「のん」という擬音語は、なぜか四回に略されているが、最初の六回使用する擬音語は、明確な意図を感じるのは、私だけであろうか。

この問題を、当日「教育実習実践指導Ⅰ」にける「講義」で触れると、大学生（北海学園大）は、神妙な顔で、「単なる偶然?」と思いつつ、何か言いたそうな素振りが忘れられない。「考え過ぎ」「深読み」と流される場合も、多々あるが、私は、なぜかそこに深く拘りたいと考える。

なぜなら、謎❺と謎❻の「のん＝六回」には隠された大いなる「仕掛け」を、私は思い描いてしまうからである。さらに、この作品の主題における「解読」の重要なポイントでもあるからだ。では、この問題について詳細に述べよう。

謎❺の「六」であるが、清水正氏は、「キリスト教」と「数字の不思議」の関連の中で、巧妙に「六」を読み解く過程は興味深い。

「六は、聖数七に一つ足りない数字として悪魔的な意義を持っている」とし、「百姓が十六（一＋六＝七）だとすれば、〜真っ白な象は八番目のもの」と推察する。[10] が、そこまで無理な考察をしなくても、仏教的な観点から、普賢菩薩が乗る「白象の牙六本」ということもあり、賢

治は何か霊感的な発想から、「六」に拘ったと考えられないだろうか。また、賢治は、科学者として「雪の結晶」「蜜蜂の巣」の六角形、または、「最小の完全数＝6を除いたすべての約数（1 2 3）の和が6となる数」に神秘的な何かを感じて、「六」を多用化したとも考えられるし、また、単純なる「偶然」とも考えることも自由であろう[11]と、私は考察してしまう。補論として付加する。

この「謎」について、それ以上に、最も重要な問題は、やはり「のんのんのんのんのんのんのん」の連続する「六」の擬音語「のん」であると私は強調したい。

ここで、『オツベルと象』の本文の「描写」から論究していきたい。その部分を先ず掲載する。

オツベルときたら大したもんだ。稲扱器械の六台も据えつけて、のんのんのんのんのんのんと、おおそろしない音をたててやつてゐる。

この「のん」は六回も繰り返されると、体験者（農業従事者）ならすぐ納得できるのことだが、本物の「稲扱器械」の発する音と全く同じような響きとなる、「音韻効果」である。五十数年前、私も故郷山形で、祖父母が、この器械を実際操り、その言い知れぬ響きに感動した記憶が、鮮やかに甦る。しかし、この読解に対して、清水正氏は、アッと驚く画期的な「読み取り」を行い、「〈のん〉論」に新たな説を提起する。「のの（のん）様」が、岩波国語辞典ではこう記されているからだ。

【神様。仏様。また、お日様。お月様。▽僧が仏に経をあげるのが「のんのん」と聞こえるところから出た語という。幼児語。】（第七版）

これを踏まえて、「のんのんのんのんのんのん」は、十六人の百姓が、「おおそろしない音をたてて」法華経を読誦すると思い込み、普賢菩薩たる〈白象〉が、それを聴きつけて天から降臨したという「読み取り」が、その問題提起である[12]。

また、氏は、水木しげるの漫画でも『のんのんばあと妖怪たち』の例をあげて、論の補足をしつつ説明する。

（七七）

この説は、一つの「作品論」であり、「深読み」という批判も当然あろう。しかし、あまりに奇想天外と同時に魅力的な「読み取り」で思わず拍手を送りたい。

その「魅力」とは、この論に立脚しながら発展させると、謎❼の「籾」を「砂」と取り違える表現、謎❽の「ちり」「沙漠」という表現の提示、及び謎❾の「白象がオツベルの作業所に来た理由とは何か」などの「謎」が、全て解明が可能となる利点からである。それを検証してみよう。

(5)「沙漠?」を彷徨する〈白象〉の訪問理由とは

謎❼❽❾について最も重要な謎は、❼の謎、「ああ、だめだ。あんまりせわしく、砂がわたしにあたる」である。〈白象〉が一人称の自分を指す場合、この箇所を除き、すべて「ぼく」である。第二日曜の「ぼく」は時計はいらないよ」とすべて「ぼく」となっている。

この部分は、初めて話すオツベルや百姓に対して「改まって語るコトバ」だからと反論されれば、それまでであるが、なぜ生活の糧であり、しかも労働の価値を表す最も大切な「籾」を、〈白象〉は無機質な「砂」に言い換え表現する必要があるのか。農民でもある「作者」は。

また、同時にこの〈白象〉は……。

それを、〈牛飼い〉はあえて、丁寧に「籾」と訂正し、補足して語る。この一行の台詞は、特に重視すべきだと私は考える。さらに〈牛飼い〉は、〈白象〉の訪問理由を勝手に「そいつは象のことだから、たぶんぶらつと森を出て、ただなにとなく来たのだらう」と安易な、語りが続くが、本当に「ぶらつと」「森」から来たのだろうか。私には異論がある。

最後に救出劇を演じる象は〈山の象〉であり、ここでは、語り部の〈牛飼い〉は、〈白象〉の住む場所は「森」と勝手な想像で言い切る。が、本当に「森」なのか。〈白象〉のいた場所が、「森」以外を前影化させる理由は、次の点と絡んでいく。

作品の本文に戻り、考察しよう。冒頭文の説明では、「作業場」の状況は、籾の散乱で「ちりで沙漠のけむりのやうだ」と語り、さらに、命の源「籾」を、邪魔者扱いの如く、無機質な「砂」と感じる〈白象〉は今まで、ど

こにいたのかと想像すると、ある答えが出てくる。こんな「物語」である。

〈白象〉は、今まで、過酷な沙漠を修行しながら、苦行に耐え、「のんのんのんのんのんのん」と仏（自分＝白象）を呼ぶ、御経に誘われ、この「作業所」に誤って足を踏み入れた。すると、百姓たちが「稲扱器械」で作業している。その光景に驚き、沙漠の状況下にいた〈白象〉にとっては、「籾」が「砂」に感じたというのは、単なる「錯覚」だけでなく、当然の結果であろうという「推測」が成り立つのだが。

この「読み」について、多くの研究者は、清水正氏以外、ほとんど触れてこなかった。なぜなのか。「深読み」として批判を受けることはあっても、様々な検証を行い、「作品論」に還元できると思うのは、私だけだろうか。「無視」や「回避」ではあまりにも残念だと思ってしまう、魅惑的な理由がここにある。

（6）十六人の「百姓」とは何を意味するのか

ここで、百姓たちに若干触れたい。

顔のない百姓たちは、〈白象〉を全く歓迎せず、オツベルとのやり取りに「ぎょっと」「ぎぐっと」「はっと」という感情の吐露だけの驚きの連続であった。

しかし〈白象〉は、「うぐいすみたいないい声」と最大限の「賛辞の言葉」で登場し、あの「謎の台詞＝砂がわたしにあたる」を吐くのだった。恐怖を隠しオツベルは、〈白象〉をここに留まらせようと言葉巧みに「勧誘」をする。〈白象〉が「居てもいいよ」言い、オツベルが、その言質を貰ったとき、彼は、謎⑩の「顔をくしやくしやにして」不可解な表情をみせる。

しかも、百姓と同じ「まつ赤になつて悦び」を示すのだった。この「まつ赤になつて」は、謎⑭オツベルの「赤い帽子」とどう繋がるのか、それも謎を一層深める一因になる。これは次回の2部で触れたい。

では、ここで簡単な整理を行い、この1部《第一日曜》の「まとめ」としたい。

（七九）

4　《第一日曜》のまとめ（螺旋の如く新たな「謎」の連続）

以上、第一日曜の謎❶～❿について見てきたが、次回の2部では、《第二日曜》の謎⓫～⓯について詳しく論究していきたい。

今回は、作品世界の紹介および、登場人物の説明も含めて論じてきた。これは、単純な「童話作品」などでは決してない。「謎」が多すぎ、これを中学一年生が国語の授業で「読み取る」となると膨大な「不可解さ」に翻弄される危険性がある。

しかし、「文学は文学として読む」という観点で、今回見てきたような「仏教」や「宗教」と殊更、関連付けて読み取る必要性はないだろう。作品を丁寧に読み取り、生徒の発達段階に応じた理解を求める「授業」が、大切だと考える。

今回の本稿の「作品論」は、大学生に「宮沢賢治論」を説明するという観点で「執筆」した論考である。様々な観点で論じている中でも、今、新たな「謎」が生じてきた。それを述べて、この論考を閉じたい。それは、《第一日曜》を書いていて、新「謎㉛」を突然発見し、「あれっ」と驚いてしまった。それは、こんな謎である。本文掲載部分から見ていく。

（八〇）

～ビフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのをたべるのだ。
とにかく、そうして、のんのんのんのんやつてゐた。
そうしたらそこへどういふわけか、その、白象がやつて来た。

⇦

（補足として、〈白象〉が何に興味を抱き、この「作業所」に来たかが明白だ。それは「のんのんのんのん」の音に誘惑（矢印参照）されて来たことが、記載されているが、〈牛飼い〉は敢えてそれに触れず「ぶらつと」「ただなにとなく」と言葉を濁してしまう。）

「謎」に戻る。

違和感がある。今まで、語り部〈牛飼い〉は、百姓とオツベルしか説明していないのに、突然「その、白象」

と人称たる代名詞の「その（連体詞）」を使い、語り出す。これは、〈牛飼い〉がこの話を語るべき聴き手に対して、もう暗黙の「既知」である〈白象〉を語っていることにならないか。〈牛飼い〉と〈聴き手〉とは、どこで繋がっているのか。または、〈牛飼い〉の語りの、ある「仕掛け」なのか。さらにもう一点、作品冒頭の「……ある牛飼いが物語る」と何か関連性があるのだろうか。清水正氏は、ことあるごとに、〈牛飼い〉は、強（したた）かな「語り部」であるので注意したいと叙述していたことを、再び思いだした。その謎も、次回以降で解明できれば、「語り」の問題として触れていきたい。

（※原文は1～3とも『〔新〕校本　宮澤賢治全集（第十二巻）』筑摩書房1995年12月25日による）

2部　《第二日曜》異次元の「宗教」論と「経済論」のプリズム

序（今回の論究における課題提示）

では、前回「『オツベルと象』試論1」を受けて、今回、2では、《第二日曜》に関する謎⓫～⓯の問題について論究していきたい。参考のために、もう一度、ここで論ずべき謎⓫～⓯について再記載する。

第二日曜

⓫「時計」「鎖」「靴」「靴の飾り」の携帯をオツベルから強引され、最初は「拒否」するが、「なかなかいいもんだ」と受け入れる〈白象〉は、悪のオツベルとの対比から、「純粋」「無垢」「（賢治の理想型）デクノボー」論の文脈だけで説明することは、可能なのか。

⓬「川から水を汲んでくれ」というオツベルの意図（仕掛け）は、作品の最終行の「おや、［一字不明］川にはいつちやいけないたら。」とどう繋がるのか。また、繋がらないのか。

⓭オツベルは、〈白象〉を搾取するために懇願する時、顔の表情をしかめてという表現と同時に「両手をうしろに組んで（顔をしかめて）」「両手をかくしに突っ込んで」という同様な仕草を、なぜするのか。

⓮オツベルの房についた「赤い（帽子）」と言う表現と「第五日曜」の〈童子〉の「赤い（着物）」という同じ「赤」の表現の共通性が、あるのか、また、無いのか。

⓯〈白象〉が「月」に語りかける時、「ああ、せいせいした。サンタマリア。」「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア」と言うのは、なぜか。「月」と「サンタマリア」の関係性とは、何か。（「月」はイスラム教、「サンタマリア」はキリスト教。〈白象〉は仏教、という三大宗教が象徴化されているのか。いないのか）

これ以外の謎がないのかと言えば、1部を執筆しかつ2部を構想しながら、様々な熟考を巡らせると、《第二日曜》だけでも、さらに多くの謎が新たに発見される。それが、次の三点（A）（B）（C）である。掲載し論究したい。

《追加の謎》

（A）《第一日曜》において、語り部〈牛飼い〉が冒頭で「～だ（断定）」と連呼し、《第二日曜》の冒頭でも同様であるが、《第二日曜》の最後の語りでは、「オツベルときたら大したもんさ（間投助詞）」という変化における謎。

（B）オツベルが、〈白象〉に依頼したものが「水」「薪」「炭吹き」という三点の関連性の謎。

（C）《第二日曜》の最後、〈牛飼い〉において、オツベルへの絶対的な賛辞が「策略」という観点が、「実際、象は経済だよ」ということから「経済（関係）」にシフトしている、賛辞の構造変化における謎等である。

1　文末表現の差異と〈経済性〉の謎（「デクノボー」論を含む）

謎（A）～（C）について、比較的に難解ではなく、論じやすい（A）と（C）から論究しよう。

（1）助動詞「だ」と間投助詞「さ」の差異（謎A）

「断定」の助動詞「～だ」の効果では、単純に「〈肯定〉的な態度表明による意思表現」と言えるだろう。《第二日曜》の冒頭では「～だ」の四連続によって、特にオツベル・〈白象〉の偉大さを誇示するリズミカルな描写となっている。

しかし、「オツベルときたら大したもんさ」では、それと大いに異なる。「さ」は、助動詞ではなく「間投助詞」であり、さらに「断定的に気持ちを添える」意思と同時に、もう一つ「疑問」を呈する穏やかな〈意思表示〉も含まれるからだ。岩波国語辞典では、例文としては「いばりくさって何さ」という抗議・詰問がそこに内在している点を、見過ごすことはできない。

前段落、《第一日曜》の最後が、「（象所有）による財産（権）」の誇示と「サーカス団に売り飛ばす」意図が「～ぜ」（一箇所限定）に前影化され、《第二日曜》の「オツベルの〈経済性〉」に繋がる意図が働いているが、同様に「抗議・詰問」的な要素が、次の段落《第五日曜》に引き継がれていることを、私は特に重視したい。

（八三）

《第二日曜》では、オツベルと〈白象〉の会話のやり取りが、異常なまでの謀（はかりごと）に基づく「経済性」を主張するオツベルに対して、一方の〈白象〉は、「愚者・無垢・純粋・無邪気」なイメージを顕在化させる。オツベルの「経済性」が、「策略」と「搾取」を伴う故に、「資本主義」や「小作争議」の関連で読み取る「作品論」が多いのは、納得できよう。

この〈白象〉を、遺稿の詩「アメニモマケズ」の「デクノボー」論で考察するのも一案であり、興味深い。そのことについて、若干補足する。

(2) 謎⓫の「デクノボー」論についての考察

先ず〈白象〉と「デクノボー」論とでは、そこに、明確な「差異」がある。それは、「デクノボー」論が、天地災害や苦悩に対して「ナミダヲナガシ～オロオロアルキ」ながら、弱者救済のために、たとえ無力であっても、行動を伴うという「行動主義」に対して、片や〈白象〉は、オツベルの策略に無関心であり、同時に、その策略全てを安易に受容しつつ、搾取される「農民」にそもそも関心を払わず、かつ救済を積極的に行わないことだ。

ただ、ことに流されて、鎖や分銅を拒否せずに受け入れ「なかなかいいね」と承諾してしまう「能天気」な〈白象〉の意図は、私たちの理解を超越している。〈白象〉の取った行動は、謎⓫の「デクノボー」論における、私の見解の一つと受け取って欲しい。

さらに「時計」「鎖」「靴」などは、〈白象〉にとって、全く価値のない無用の長物だが、人間にとって惑わされる「贅沢品」であり、それは、次の「経済性」の中身に深く関わってくる。

(3) オツベルにとっての「経済性」とは何か（謎C）

では、オツベルの「経済性」（謎C）とは、何か。それは、《第一日曜》の最後にある、オツベルの〈顔〉が、象徴的に暗示している。〈白象〉の「（ここに）居てもいいよ」という確約を勝ち取ったオツベルは、「顔をくしやくしやにして」さらに「まつ赤になつて悦びながら」[13]、財産権を主張する〈牛飼い〉の言葉に繋がっていく。その先には、「サーカス団に売りとばす」ことを暗躍する「狙

い」も付加して、資本主義の強暴な「搾取」を前影化させる。

その「搾取」の本質を探ると、オツベルの「経済性」とは、すなわち「数」に収斂させる。それは、藁の「十」「八」「七」「五」「三」という経費削減の「数」であり、その言い訳は「税金の徴収」という経済的なメカニズムを根拠にしながら、「策略」をめぐらす「狡猾さ」が顕著となってくる。このような「搾取関係」および「経済性」を鑑みた場合、小森陽一氏が提起する「歴史的コンテクストにした新たな意味作用を発揮」する作品であり、第一次世界大戦後の印度独立運動（ガンジーの無抵抗主義）と絡めて読み取る「作品理解」も充分可能であろうと考えられる[14]。

では、オツベルが巧妙な「策略」で〈白象〉に依頼する「水」「薪」「炭吹き」（謎B）という三者には、どんな意味付けが、隠されているのであろうか。または、単純な生活必需品そのものなのか。その（謎B）について、次章の2で考察しよう。

2 「水」「薪」「炭吹き」という関連性における謎（B）

「水」については、謎⑫「川から水をくんでくれ」と、謎㉘《第五日曜》「川にはいつちやいけないたら」の関連性で論じたいのだが、問題があまりに複雑怪奇過ぎるので、3部に委ねたいと考える。この2部では、「水」「薪」「炭吹き」を一括して三者の関係性だけに限定し、論究することにする。

最初、私たちは、「水」は、田畑に水を与えるため、または、生活を維持するための飲み水、「薪」もまた食事を作るたけの燃料であり、象の生息する印度では、暖房は不要であろう。「炭吹き」は、鍛冶場での鉄製造となれば、オツベルの工場は、かなり大規模な作業所であり、多くの百姓を雇い入れて経営を行っている工場と予想される。

こんな「読み取り」しか思い浮かばない中、『旧約聖書』の予言者エリヤ（『列王紀上』）に焦点をあて、読み取る「新たな読み」が、清水正氏から提示され、論議を沸騰させる（清水正『宮沢賢治の神秘』「Ⅲ部16章「エリヤ編」）。

（八五）

《第五日曜》で扱う、[3]の中の謎㉓「烏の夢」と㉔「（オツベル）もう何もかもわかつてゐた」に関連する問題であるため、ここで絡めて探究していこう。

「山の象」の襲撃を予告していたかのようなオツベルの台詞や行動は、興味深い。先ず、オツベルが見ていた「烏の夢」と描写され、続いて「もう何もかもわかつてゐた」と〈牛飼い〉は、はっきりと断言する不思議さ。

この「烏の夢」とは何か。また、オツベルが「何もかもわかつてゐた」のはなぜか。これは、作者賢治が、主題を意図した最も大きな「鍵」ではないかと、私は考える。清水氏は、この問題をユダの王、アハブと予言者エリヤとの物語で説明するという、アクロバット的な「読み」の試みは興味深い。

それは、予言者エリヤが、「イスラエルの神、主」から、「烏」を遣わされ、「水」と「パンと肉」を施され「烏」が、エリヤを養うという話（『旧約聖書』『列王記』からの引用）である。この話を引用し「烏の夢」とは、この「列王紀上」の夢だと大胆に（若干強引に）解読する。

ことの内容は、ユダの王、アハブがイスラエルの神に背き、一方の預言者「バアル」に従ったことに対して、預言者エリヤ主導による「イスラエルの神、主」の力を誇示するために行った儀式が、「一頭の牛」を裂いて、「薪」の上に載せて、十二個（6の倍数）の「石」で祭壇を築き、「四つのかめに水（「六」と無関係の「四」）」を満たしたという舞台設定であった。

この儀式で、背教との断が下される「バアル」は、沈黙したのに対して、「イスラエルの神、主」＝エリヤは、溝に水をコンコンと流させ、「主」の火が「薪」「石」「ちり（「第一日曜」に記述あり）」を焼きつくし「主」の力を誇示したという叙述が、そこにある。

清水氏は、「石」は〈白象〉の「息で、石も飛ばせるよ」の台詞に繋がり、かつ、「炭」も「石」の一つ、また、「一頭の牛」は〈牛飼い〉という関連性を力強く指摘する。

これは、一つの「読み取り」であろう。賢治がどの程度、どんな『旧約聖書』との関連性から「キリスト教」を意識して執筆したのか、今は、理解するのは不可能であるが、興味深い「一説」として捉えたい。

しかし、いくら興味深い関連事項が、様々羅列され、

同時にその連結部分を「恣意的な物語」で無理に関連付けることは、私もまた、多くの方々と同様に、明らかに「深読み」「主観的」と解してしまうのだが。

なぜなら、「月」「サンタマリア」と同時に「沙羅（双）樹」が登場し、仏教に類する「童子」まで重要な役で演出されるこの「童話」は、あくまで「仏教界」を中心として解読すべきだと、私は思うからである。

また、主たる〈白象〉は、決してキリスト教に登場しない。計り知れない「謎」のオンパレードがこのような多様な「読み」を誘発するのであろうが、一案としては、余りに魅惑的だ。

次にオツベルの語る台詞及び、行動・態度の謎⑬「両手を後ろで組んで」「手をかくしに突っ込んで」の仕草について、考察しよう。

3　「烏の夢」を見るオツベルとは、サタンたる「全能の神」なのか

清水正氏は、オツベルを資本主義の「悪徳経営者」とは単純に見ない。「サンタマリア」や「山の象」と同じ神の一面、しかも、「烏」という自分の「死の予告」に直結する「神の両面の一つ＝悪魔（サタン）」と解読する「読み」は、非常に興味がそそられる。

題が『オツベルと象』で明らかなように、主人公は、単なる〈白象〉に限定すべきではなく、明白に「オツベル」、しかも主となる固有名詞を持つ人物だからだ。《第一日曜》では、謎の〈白象〉以上に、人間味溢れる仕草のオツベルにおける行動及び台詞は、私たちを魅了して止まない。

〈白象〉に接するとき、農民の「ぎょっ」とした驚きや不安よりも、オツベルの警戒心だけでなく、彼の身構える様々な仕草（謎⑬）は、圧倒的に「小心者」のそれを描写し、庶民の仕草を象徴する魅力が、ある。

例えば、《第一日曜》では、六寸のビフテキをたらふく食する彼は、「ポケットに手を入れながらちらっと鋭く象を見た」「（像に興味津々なのに）退屈そうにわざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで」という仕草も、なぜか魅せられてしまう。

また、策略を施す場合、「顔をしかめて」さらに「両手

（八七）

を後ろに組んで」「両手をかくしに突っ込んで」〈白象〉を搾取する手立ての提案を図る。ここで、最も重視すべき点は、二十馬力の〈白象〉に対して、オツベルが決して、強制をせず、策略を含む「提案」という形で「本人の意志」を確認しながら、ことを勧め、〈白象〉は、自ずと快諾しつつ、「なかなかいいね」と全権委任してしまう奇妙さである。

読者にとって、オツベルの小賢しい「策略」以上に、なぜここまで、藁の量を巧みに削減しつつ、さらに「苦しいです。サンタマリア。」と〈白象〉が絶望的な嘆きを発したのに拘らず、オツベルは「ことごと象につらくした」のかが、想像を絶する「描写」である。

この問題は、鎌田均氏も同様に彼の論考で指摘している[15]が、私も全く同感である。

この謎は《第五日曜》の謎⑱（〈白象〉の嘆き）に関わる問題であるが。オツベルの意図は、経済的な「搾取」や「策略」にだけに矮小化できず、更なる「謎」の深淵に、私は惹きこまれてしまう。その謎を解く鍵が、先程叙述した、謎㉓（烏の夢）と謎㉔（オツベルの何もかもわかつてゐた）と関連してオツベルを全能の神と捉える説は、〈白象〉にあえて試練を徹底的に施し、試す神の姿が、「ことごとく象につらくした」理由と解すれば、ある意味で説得力を持っている。しかし、これ以上解明する「術がない」以上、謎は謎のままである。

「謎」を「謎」のまま終わらせるという「次の世代への課題」とすることも一案であろうが、拘りたい問題であることは確かだ。

清水正氏の「深読み」という一案と括弧に入れてもなお、「予言者エリヤ」説との繋がりで「読解」することで多くの「謎」が、解き剥がされる興味も、そこにはある。興味は尽きない「謎」がまだまだ続く。

4　オツベルと「月」の使者、「童子」を着飾る〈赤〉論

科学に精通した宮沢賢治は、擬態語・擬音語また、星や鉱石などと並んで「色」に拘る作家である。この「赤」（謎⑭）にどんな意図を込めて作品を描いたのか。それを探る旅は、「主題」解明に繋がると、私は考える。注(13)において、〈赤〉論の二つの見解（感情説と悪魔的意図説）

を挙げておいた。本作品での「赤」を含む描写部分は次の七か所である。参考のため再度左記に掲げる。

①「十六人の百姓どもが、顔をまるつきりまつ赤にして」
②「オツベルが顔をくしやくしやにして、まつ赤になつて悦びながら」
③「オツベルは顔をしかめながら、赤い張子の大きな靴を、象のうしろのかかとにはめた。」
④「オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり」
⑤「（象は）時に赤い竜の眼をしてぢつとこんなにオツベルを見おろすようになつてきた」
⑥「赤い着物の童子」
⑦「赤衣の童子」

以上を、私なりに類型化し、考察すると、①②は、単なる「感情」の吐露で説明することは、可能であろう。①は、百姓が、オツベルの元で一所懸命に六台の稲扱器械を動かし、働かされている「ひたむきさ」の表情である。また、②はオツベルが、〈白象〉を自分の所有化することを諮り、それが実現された時の、喜びの感情表現が「顔をくしやくしやしてまつ赤になって悦び」となろう。その諮りごとは、「悪魔的」な要素を含むが、ここでは、単純に「感情の吐露」としたい。

③は、〈白象〉を所有化して、かつ思いのままに働かせる「搾取」の意図が明白であり、無垢な〈白象〉が、華やかな赤の飾りを、悦ぶだろうという「策略」を含む「悪魔的」な要素と考えたい。それと同時にオツベルの、④「房のついた赤い帽子」は、〈白象〉を酷使する彼の人格を充分に象徴する「赤い＝悪魔的」な要素が最適解であろう。ここで「悪魔的」と表現したのは、清水正氏の「全能の神」説に依拠した表現となってしまった点は、自戒したいが、何か「作為」感じる、マイナスイメージ観を呼び起こす「赤」の描写であることには違いない。

問題は、赤の⑤⑥⑦の三点だ。

先ず、赤⑤「赤い竜の眼」と「オツベルを見おろす」であるが、《第五日曜》に掲載された謎⑰と重なり、《第

（八九）

二日曜》から《第五日曜》に掛けて、〈白象〉が変化す重要な表現の一つが「赤い眼」である。

今まで、どんな困難ことも全て受容していた〈白象〉が初めてここで、反抗する態度を示す。しかもオツベルを「見おろす」その眼、それは、「赤い竜の眼」となって、読者に提示される。

無垢・純真な〈白象〉が、まだ智慧のない弱者であるが、明らかにオツベルに対抗しようと「行動」を起こすスイッチとなる「赤い竜の眼」であり、結果的にはオツベルを潰すという契機たる諸理由から、「暴力的＝悪魔的」な要素として把握したいのだが、どうだろうか。

では、最も難解な⑥「赤い着物の童子」⑦「赤衣」をどう考えるべきか、論究しよう。

「サンタマリア」は「神」として、別格の存在であるが、「月」もまた「童子」も〈白象〉の絶体絶命の危機を救う「徳ある人物」「助け舟」とは捉えにくいのは、私だけであろうか。

「月」の仕草が、サンタマリアの如き、女性的な要素が皆無であり、ナオザリ（乱雑）とした言い方が、違和感を抱かせ、納得できない。

特に「月」の台詞が、上から目線であり、救済という観点以上に策略的な誘導とも取れる「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意久地（原文ママ）のないやつだなあ」とけなし挑発した後、唐突に「手紙」を書くことを促す。

しかも、他人事もように「笑って」と続く。すかさず〈白象〉が「お筆も紙」もないと嘆くと、同時に「赤い着物の童子」は、間髪を入れず待ってましたと、ばかりに「紙と硯」を用意して、登場する手際の良さである。

ここには、賢治の大いなる「ある意図」を感じてしまう（決して死ではない）直接の原因であるからだ。

「赤衣」に戻ろう。「赤衣」をどう読むのか。教育出版社の教科書では「しゃくえ」と読み仮名を記す。

しかし、別の読み「せきい」と読めば、別の意味となり、私たちを悩ます大きな要素となっている。

（九〇）

「しゃくえ」は広辞苑より「赤色の衣服、特に（平安時代の公家）五位の人の着る袍」。

一方、「せきい」とは、広辞苑では「あかぎぬ」と同じであると記すが、『新選漢和辞典』（小学館）では、「①赤いきもの②罪人がきる赤いきもの」となる。仏教の関連で読み解けば、「童子」の着る着物であるから、仏教に帰依する者となる。

しかし、軽薄さを感じる「月」と同様に「赤衣」を、純粋無垢な仏教徒ではなく、何か裏（策士・悪魔の僕）のある人物と、捉えたくなる衝動が、私を俄然襲う。

しかし、キリスト教の「サンタマリア」やイスラム教の「月」、そして「童子」を仏教と捉える三つの関係から考察すれば、一つの宗教で読み解く必要もなく、清水正氏のように聖書に基づく読み取りは、「深読み」として一掃されるのであろうが、この作品が〈白象〉「印度」「童子」とくれば、仏教を基調として描かれた童話というのは、疑うことのできない事実である。

そこから「赤衣」を「勝悳赤衣（しょうとくしゃくい）菩薩」とみなす説も、一考の価値があるのではないだろうか。一言、「勝悳赤衣菩薩」[16]は徹底的に調べたが、検索できなかった。大変残念であった。

5 「サンタマリア」と「月」の謎を探る

では、試論2部の最後、二回の「サンタマリア」（謎⑮）について考察してみよう。本来なら、この「サンタマリア」論は、3部（三回のサンタマリア）で論じるべき内容であるが、このので、試論を展開しつつ、3部では、主題に関わる問題に絞り論じることにする。

五回も「サンタマリア」に語り続ける〈白象〉に対して、「サンタマリア」はすべて沈黙を貫く。しかし、それに代わって「俄かに」語りかけるのが、「月」である。本来ならば、語りかけるのは、語りかけられた「サンタマリア」すなわち、守護神である「主」が、返さなければならないのに、神はいつも「沈黙」し、その代替として「月」が登場する。[17]

「月」とは、聖母「サンタマリア」の代弁者として捉えるべきなのか。または、「月」の言葉は、（この主張は、

（九一）

清水正氏であるが)〈白象〉の内面たる心の声なのであろうか。ここでも全て「謎」の袋小路に佇んでしまうが。

作者は全く「語らない」。語り部の〈牛飼い〉もまた、同様である。

沈黙する「神」に対して、雄弁なる「月」。この差異をどう解釈すべきか。前章同様に、その「月」は妙に人懐こく「おや、なんだって?.さよならだ?.」と軽々しい。しかも次の言葉が「何だい、なりばかり大きくて、からつきし意久地のないやつだなあ。仲間へ手紙を書いたらいゝや。」という、〈白象〉にとって全く予想もしない言葉は、まるで「山の象」を呼び寄せ、オツベルをたたき潰すことを催促しているように感じるのは「深読み」だろうか。

その誘いは、「月」の「笑いながら」でるため、一層、そんな「謀(はかりごと)」と関連付けてしまうのだが。これは、絶望に瀕した〈白象〉にとって「月」の如くの「笑いごと」では決して済まされない、命に関わる状況であろう。

(九二)

さらに、切羽詰まった〈白象〉という当事者にとっては。手紙を書くための「紙と硯」がない緊急事態であった。

しかしながら、直ぐに用意される段取りの良さ、それを準備して待ち構えるのが「赤衣の童子」だ。その手紙の内容も〈白象〉は控えめにただ「ひどい目に遭っている。みんな出てきて助けてくれ」というありきたりの内容である。

ところが、何故か、これが、「誤読」という拡大解釈が自然になされ、「待ってました」とばかりに、「山の象」の怒りに溢れる「大爆発」となる。

そこには、「オツベルを殺せ」「踏みつぶせ」と帰結する手紙の内容では、まったく微塵もない。そこまで〈白象〉はオツベルを憎んでもいない。

なぜなら、全て、〈白象〉がオツベルの依頼を完全受容した自己責任であることの結果であり、全責任は自分にあるのだから。これを、言葉のとり違えだとか、また、「〈ことば〉は伝わらない」という意思疎通の問題だけで解決できないように、私は思う。[18] そこにはやはり目に見

えない、作者賢治の「意図」があると思えてしまうのは、私だけだろうか。

ここに隠された「意図」を、もう少し論究してみよう。「月」と「童子」連携プレイのごとく、用意周到に準備される「紙」と「硯」の謎がここにある。

この「月」の会話は、神＝サンタマリアの言葉ではなく、清水正氏のように〈白象〉の「内面心情」と読み取ることもできる[19]が、余りに手際の良さに、ある「意図」をどうしても感じてしまうのだった。

この作者賢治の「意図」を、観世音菩薩を含む「キリスト教」の受難の「物語」で読み解く、余りに宗教的な清水正氏の「解明」は、大変興味深いが、私は、あくまで「疑問」を抱いてしまう。

これは、大いなる「謎」である故に、後は仮説で「物語」を綴るしかないのではないだろうかと思いつつ、私の「物語」という解読は、次回の試論3で論じたい。

この場では、私の「読み」の方向性としての、見解を触れておきたい。

この作品の基調は、一貫して法華経たる「仏教」である。さらに、賢治の遊び心から、エスペラント語に共通する如くの、宗教の世界観を拡大させ、大きな天地創造の「神」であるサンタマリアを登場させ、絶望の淵に嘆く〈白象〉に対して、もう一つの「イスラム教の神＝月」を関連付けて、印度の地で物語った「童話」と理解したいのだが、どうだろうか。この論点については、試論3部で再度、詳細に言及していこう。

6　試論2部のまとめ（賢治による「謎」という螺旋）

この2部では、謎⓫～⓯に追加して謎A（「だ・さ」）B（「火」「薪」「炭吹き」）C（「経済性」）という八つの謎を巡る諸問題を論究してきた。「謎」が「謎」を呼び、ここまで私の「物語」を築き、検証してきたが、まだ、終わらない『オツベルと象』論である。

賢治は、こんな謎の螺旋を充分予期しつつ、策略を練りながら、「作品」を綴ってきたのではないかと深読みしています作品があまりに多い。

なぜ、こうなるのか。作品として「完成品」を目指さ

（九三）

ず、「永久の未完成、これ完成である」(『農民芸術概論要綱』)という言葉が象徴している、「謎のスパイラル」が、張り巡らされているのではいだろうか。

失礼だが、一見、雑多煮のような作品。そこに「仏教」「キリスト教」「イスラム教」と一緒にしながら、私たちには見えない世界があり、それを賢治が垣間見て新たな「作品」として書き留めた作品が、『オツベルと象』ではいだろうか。そんなことを想像しながら、まとめにならない「まとめ」として提示し、試論3部に繋げていければよいと考えている。

(九四)

3部《第五日曜》語り・語られる「死」の「物語」という思考のプリズム

序（「謎」の整理と論じる順次性の提示）

今回は、「オツベルと象」試論3部ということで、今までの論考における完結編となる。試論2部で論じた「謎」は、重複（☆が2で論じた「謎」）を避け、以下のような柱「目次」で骨子を作り、整理しながら、ここでは論究していきたい。

では、《第五日曜》の「謎」について、ここに改めて左記にて再掲示する。したがって、以下の謎《⑲㉑㉓》は、2で考察済みと処理し、ここでは論じないこととする。

《試論3における論考の目次》→「謎」との対応

1　〈白象〉の正体→⑰⑱
2　「山の象」の正体→㉒㉕と⑱
3　「オツベルへの語り」と「その死」→⑯㉔㉚
4　「手紙」偏→⑳㉖
5　「語り・主題」偏→㉗㉘㉙

第五日曜の「謎」の再録

⑯《第五日曜》の冒頭において、前回の話の続きから、聞き手は〈白象〉がその後どうなったか知りたいのに、〈牛飼い〉は、敢えては話をズラし（〈白象〉を回避しつつ）「オツベルかね」と語る、その意図（策略）とは何か。

⑰〈白象〉の「赤い竜の目」とは何を意味するか。（《第一・二日曜》と《第五日曜》の〈白象〉では、何か変化があるのか。有る場合、「竜の目」は、どのように関係するのかなど。また謎⑭の「赤い」とどう関わるのか。関わらないのか）

⑱オツベルは、〈白象〉の「（嘆き）苦しいです。サンタマリア」という声を聞きつつ、敢えて一層「ことごとく象につらくした」という彼の隠された「真意」とは何か。

☆⑲〈白象〉は月に「さよならです。サンタマリア」と別れの言葉を述べたのに対して、「月」の助言が、投げや

（九五）

りでかつ、男コトバであり、しかも「わらつて斯う云った」という「真意」は、どこにあるのか。

⑳〈白象〉は、助けを求める方法で、「声」「叫び」ではなく、敢えて「手紙」という紙（記録性に富む手段）に拘った作者の意図は何か。（あまりにテキパキと「硯と紙」が用意されるところに作者の、特別な意図を感じるが）

☆㉑〈童子〉とは何か。また前の謎⑭で指摘した、「赤い着物の童子」が、すぐ「赤衣（しゃくえ）」に変化するのはなぜか。

㉒「山の象」の襲撃が「どいつもこいつもきちがいだ」「花火」「噴火」「グララアガア、グララアガア（六字擬音語の二連続）」と怒りの爆発表現が、「破壊」をイメージするその意図とは、何か。

☆㉓「山の象」の襲撃の前、オツベルが昼寝の盛りであったが、その時、垣間見たオツベルの「烏の夢」とはどんな夢だったのか。

㉔「山の象」の襲撃に対して、オツベルは「眼をぱつちりとあいたときは、もう何もかもわかつてゐた」と語

（九六）

られるが、オツベルは何を、また、どうして「わかつてゐた」のか。

㉕「山の象」の一匹が「なかなかこいつはうるさいねえ。ぱちぱち顔へ当たるんだ。」の文句について「こんな文句をきいたやうだ」とオツベルが語る意味とは、何か。（《第一日曜》の〈白象〉の台詞との共通性からも考察する）

㉖手紙では「みんな出てきて助けてくれ」と書いたのに、「山の象」は「オツベルをやつつけやう」と叫び、オツベルを潰してしまう謎は、須貝氏が指摘する《「ことば」は伝わらない》というだけで説明可能なのか。

㉗「白象はさびしくわらつてさう云つた」について「さびしく」の理由とは、何か。

㉘最後の一行「おや、［一字不明］、川へはいつちやいけないつたら」は、誰が誰に対し、なぜ言ったのか。また、作品の主題との関係とは。

㉙最後の一行目にある「一字不明」は、記号なのか、または、どんな文字だったのか。

㉚オツベルは、本当に死んだのか。本文では〈牛飼い〉

も、もったいぶって「オツベルかね、そのオツベルはおれも云はうとしてたんだが」と語り終えた後で、「居なくなつたよ」と聴き手に説明する。しかも、作品では「オツベルは（拳銃の）ケースを握つたまま、もうくしやくしや潰れてゐた」としか、表現されていない。どこにも死んだとは書かれていない。「皺くちやで灰いろ」の〈山の象〉たちと、彼らに「くしやくしやに潰れてゐた」オツベルとは、どう繋がるのか。

1 〈白象〉は何者か、また訪問の目的とは（謎⑰⑱）

では、謎⑰「赤い竜の目」から始め、その後、謎⑱「オツベルの酷使」を絡めて論じよう。〈白象〉の正体とは何か、から考察する。

〈白象〉とは、ペンキを塗った偽物ではなく、他の象とは全く異なる、二十馬力もある聖なるかつ、象徴たる〈白象〉そのものだった。その真の姿とは、何なのか。清水正氏の主張するように「普賢菩薩」の化身で、民を救済しようと「神＝天」から送らえた「特別の象」であろうか。また、「よだかの星」論や作者賢治の願いを託された「デクノボー」的存在論から、読み取ってよいのか。深い謎に包まれている。

「普賢菩薩」説もまた「デクノボー」説の両者は、全て前述（2部1章）した通りことごとく「否定」され、民の救済を避け、「しくしくしくしくしく」泣くだけの弱虫の〈白象〉であった。

この〈白象〉の「しくしくしくしくしく」という四回のリフレインは、「四苦四苦四苦四苦」と読み直すことができると、清水正氏は提示する。「四苦」とは、当然「生老病死」の苦であり、さらに四苦（愛別離苦・怨憎会苦・求不得苦・五陰盛苦）を加えて、「八苦」と解読する説もまた、大変奥深く、興味が尽きない。

次に、〈白象〉の正体を、彼の訪問の目的に関連して考えていきたい。

《第一日曜》の〈牛飼い〉の語り「たぶんぶらつと森を出て、ただなんとなく来たのだろう」などと、能天気な言い訳を信じることは、到底できない。1部で前述した通り、六回の「のんのんのんのんのんのん」に誘われ、

（九七）

聖者たる〈白象〉としての使命（目的が何か）が確実にあったが故に、何故に、オツベルの仕事場に居座り、素直に従ったのは、どうしてか。その「使命」について、作者賢治は全く触れず、自由な想像の「語り」に委ねてしまう。ここが、「作品」が語らずして、読者が自由奔放に「語ってしまう」大いなる宮沢賢治作品の魅力たる所以であろう。

では、そんな弱虫の〈白象〉が、初めて反抗心をたぎらせ「赤い竜の目をしてじっとオツベルを見おろす」ことをしたのは、何故だろうか。

実際〈白象〉は、二十馬力もあるのに、何も実行できず、ただ「さよならです。サンタマリア」と、愚痴たる「最期の言葉」しか発することができない。ここから、推察できることは、「赤い竜の目」（謎⑰）とは、もうオツベルに従えないという、明確な意志（反抗心）表示であり、その怒りのベクトルがオツベルに向かいながらも結局、無力であり、「山の象」への援助を願い出て、その結末が、「竜」「噴火」の破壊力の如き、潰される「オツベルの姿」を暗示させる伏線であると、私は捉えた。

（九八）

では、何故オツベルが、あえてそんな弱者の〈白象〉に対して、「搾取」の限界を超越した苦難を与えるのか、謎⑱は、一層深まるが、答えはでない。しかしながら、こんな推論が、成り立たないだろうか。

まるで、〈山の象〉に通じる〈白象〉の嘆きさえも、「オツベル」は、「何もかも分かっていた」からこそ、究極の「イジメ」を行い、「山の象」を呼び寄せるために「誘導している」と邪推でなくても想像してしまう推理（問題）が、発生してしまう。

この問題は、謎㉚（オツベルの死の是非）と重なるため、ここで一端、中断しつつ、3章「オツベルの死」で改めて論じることにして、〈白象〉が救出を願い出た「山の象」の謎を先に論究してみよう。

2　「山の象」の正体は何か、「火の神か」「悪魔＝サタン？」（謎㉒㉔㉕）

では、先ず謎㉒「山の象の噴火」に触れ、次に謎㉕「ぱちぱち顔にあたる」について考察しよう。

〈白象〉が、仲間とする「山の象」たちは、沙羅（双）

樹の下で、のんびりと昼寝をしたり、碁を打ったりと、議長の象の「民主的な組織体」のもとで、生活しているが、〈白象〉の危機に瀕して、謎㉒の「真っ黒になってほえ」、「花火」「噴火」の如く、怒りを爆発させて、一気呵成に「グワア、グワア、グワア、グワア」（擬声語）とこれも、謎の四回のリフレインで表現する。この一連の描写は何を意味するのか。

〈白象〉の手紙には、「ずゐぶん眼にあつてゐる。みんなで出て来て助けてくれ」としか書かれていないのに、「山の象」の憤怒は、尋常ではない。

その「爆発」のパワーは、「オツベル」の悪事を全て掌握した上での、その実行者の彼を簡単に潰してしまう破壊力だ。「議長」を頂点とする「民主的組織体」と相反する、この暴力性は、何を意味するのだろうか。

「真っ黒」という最初の表現が伏線となり、「オツベル」は、片手に近代兵器である六連発のピストルを握っていたにせよ、その破壊力は無に解しぺしゃんことなってしまう結末は、あまりに凄惨だ。

「山の象」や〈白象〉にとって、異物と感じ拒否するものは、稲扱器械の吐きだす「籾殻」やピストルの「弾丸」も同じ機械文明の象徴、そのものではないだろうか。その近代機械文明を駆使しながら、「搾取」を繰り返し「収益」を挙げる、「オツベル」は、何故に、粉々に潰されなくてはならなかったのだろうか。

しかし、その危機的状況を「オツベル」は、「烏の夢」に微睡（まどろ）みながら、「もなにもかもわかつてゐた」と、謎の台詞を吐き、「山の象」と対峙する姿を、単なる近代文明の瑕疵を容認する、軽薄な「象徴」と過少評価してはいけないだろうと、私は考える。

「オツベル」の予知能力（謎㉔「オツベルはなにもかもわかつてゐた」）は、謎に満ちているが、この自分の「粉砕・破滅」までも予期していたのではないだろうかと、想像してしまう表現がここにはある。

それは、〈白象〉に「水」「薪」を依頼する場面でも、「ぼく薪を持ってこよう。（略）ぼくはぜんたい森へ行くのは大好きなんだ。」と笑う〈白象〉に対して、唯一、彼自身は「オツベルはぎよつとして、パイプを手から危く落そうとした」という、意味深な「描写」からの推測か

（九九）

らである。ここには、〈何か〉が必ずあると疑ってしまう表現だ。

〈白象〉が森へ行って、「山の象」と接触したら、また、その危惧を感じ取って「ぎよつ」としたのではないだろうかと、読み解くことができよう。

さらに、〈白象〉を常に監視しながらも、月に嘆き悲しむ姿をみても、いやそれだから一層、謎⑱「ことごと象につらくした」のは、まるで、「山の象」の反撃を期待していたからと、読み取ってしまう不思議さである。

自分の殲滅を予期する「夢」であるが故に、「烏（＝死を導く）の夢」というのは、ブラックユーモアと考えてしまうのは、「深か読み」と退けられるのは、当然としても。そんなことを想像してしまう作品の魅力が、ここに満載である。

もう一つ、付加すれば、オツベルは「なにもかもわかっていた」の後に、「オツベル」には全く非協力的であり、無気力かつ無抵抗な百姓を励ます、謎の「語り」がある。それは、「ラッパみたいないい声で、百姓どもをはげました」と言う箇所である。軍隊の如く進撃を軽やかに促す

「ラッパ」の響きは、例えとして、「いい声」と説明されても腑に落ちない。これもまた「謎」であり、自ずと想像力を膨らまされ、魅了する言葉である。

この表現を単なる「楽観的な言動」だけでは捉えきれない、賢治の特別たる「意図」を感じ、惑わされてしまうのだ。なぜなら、前半部分ではあれだけ〈白象〉を怖がり、小心者の隠蔽（仕草）が描写されていている「オツベル」にとって、ここでは、「山の象」の大群の襲来であればこそ、大パニックに陥っても当然であるのに、その格差には、私は不自然さを感じてしまうからでもある。

では、次に3部の最重要テーマである「オツベル」の正体と共に〈牛飼い〉の「語り」が導く「その死」を論究していこう。

3　「オツベルへの語り」と「その死」（謎⑯㉔㉚）

初めに《第五日曜》の〈牛飼い〉の語りのズラシ（謎⑯）に注意して欲しい。「第三日曜」と「第四日曜」が意図的に省略されているのは、大事件が起きて、〈牛飼い〉

の語る意欲が削がれたためと解釈もできる冒頭だ。[20] ここで、読者にとっては、最も気になるのが、「藁」の糧を削減され、衰弱する〈白象〉の今後であるのに、その〈白象〉には、あえて全く触れず、「オツベル」を語る。

流れとしては、「オツベルの経済性」をあれだけ、評価したが故に、《第五日曜》では「オツベルかね」と、何食わぬ顔で、「オツベル」の話題で始まるが、その語りでは、「オツベルが死んだ」とは決して語らない、さらなる謎の奇妙さがある。

ただ、「いなくなったよ」と表現するのは、〈牛飼い〉の強（したた）かさとと、同時に、読者を話に引き入れる巧妙さが感じられるが、「オツベルのぺしゃんこ事件」の重大性から、〈白象〉を敢えて省いたのは頷けるにしても、その原因を作った問題の当事者である、〈白象〉を回避しながら、「オツベルかね」という語りは、誰が彼のことを聞きたいと望んだのかと、大いなる疑問を抱かせる。謎は一層深まるばかりである。

ここでは、謎㉔「オツベルの予知能力」については、第2章である程度論じたので、とりわけ、謎㉚「オツベルは本当に死んだのか」について、重点的に論究していこう。

オツベルが真実死んだのであれば、〈牛飼い〉の語りは、「死んだ」と真実を語るべきなのに、「いなくなつたよ」と語り、読者のはやる気持ちを察しながら「まあ落ち着いて聞きたまえ」となだめる周到さ。

この「謎」は、〈牛飼い〉の語りの「謎」と置き換えてもいいだろう。噴火の如き巨大な力である「山の象」の襲撃にさえも、果敢に挑み続けた「オツベル」。その結果、完全に踏み潰されても「殺された」という記述は全くないことだ。ただ「オツベルはケースを握ったまま、もうくしやくしやにつぶされていた」という記述だけが、そこに残る。

前にも叙述したことだが、これと同じ表現が『注文の多い料理店』の紳士の顔の描写だ。「顔はまるでくしゃくしゃの紙屑のようになり」とあり、最後は、猟師に救出されても、紳士の顔だけは元に戻らないという結末の表現で、終わっている。紳士の顔は、潰された訳ではな

（一〇一）

く、ただ恐怖に戦き、「紙屑」のようになったのだが、一方、「オツベル」は完璧に押し潰され「ぺしゃんこ」の状態であり、若干異なる描写のため注意が必要であろう。

だからこそ、「死」は自明のことであるのに、あえて、〈牛飼い〉はそれを否定（曖昧）するかのように「いなくなったよ」と語り、同時に作者の意図でもある、その「真意」とは何か。

もし仮に、死んでいないとすれば、逆に不死身である「オツベル」の真の「姿」が、判明する逆説が、ここに成立するのだが、どうだろうか。

清水正氏は、ここでも「オツベル＝〈神〉」として規定し、〈白象〉に苦行の道を試す《神＝サタン》と解読する興味深い説を取り上げる。〈白象〉はその苦行に屈して、「山の神＝象」の援助を求め、筆と紙で誓約してしまう「罪」を犯したが故に「さび（寂）しくわら（笑）つて」と帰結させる。したがって、氏の結論は、「オツベルを殺してしまった」ということを認めながらも、「オツベルは永遠の生命を保っている」と自信に満ちた「断定」の記述をするのだった。

（一〇二）

一方、私の読解は、それとは若干異なる。それは、異説「オツベルはペシャンコになって潰れたが、（『注文の多い料理店』の如く）「殺されていない」同時に「死んでもいない」という結論であるが、どうだろうか。この結末もまた、多くの「謎」に包まれ、解決できない私たちに多くの課題を託す宮沢賢治が、ここにいる。

4　救出の嘆願は、声でなく何故「手紙」か（謎⑳㉖）

では、謎⑳「手紙の救出願い」と謎㉖「意思疎通のズレ」について論じよう。[21]

「サンタマリア」と、五回も救いの声を上げざるを得ない〈白象〉であるが、神の「サンタマリア」は、あくまで沈黙し、代わりに「月」がにわかに語りかける。「仲間へ手紙を書いたらいいや」と巧みに誘う「謎」。しかし、「筆も紙もありませんよう」と「細うきれいな声でしくしく泣き出」すしかない情けない、純粋無垢な〈白象〉。

ここで、救出（誘惑）の「主」は、あくまで「筆と紙」で書き記そうとしているのは、何故なのか。また、筆と紙も用意周到に「赤衣の童子」がすぐ準備していたとい

う、手渡す手順のこの見事さは、何を意味するのか。

まるで「謀（はかりごと）」のような錯覚を覚えてしまうのは、私だけであろうか。この刻印された文字が、手紙となり、内容的な「意思疎通」のズレから、踏み潰される不幸な「オツベル」。手紙の内容は、優しく単なる「ずいぶんひどい目に遭っている。みんな出てきて助けてくれ」という、在り来たりであり、かつ普通のものだったのだが。

一方、待ち受けるべき、烏の夢見る「オツベル」は、なぜか、「何もかもわかつていた」のだから、余計に作者の「意図」を疑ってしまう作品となっている。「意思疎通」が図られないのは、全く不幸な「偶然」なのではなく、「必然」と考える「読み取り」は、自然ではないかと思う。が、ここでも謎は、解明されず、深まるまかりである。

また、刻印された「手紙」という形を敢えて採用し、かつ、筆や紙まで用意周到に与える「月」と「赤衣の童子」とは何者なのか。キリスト教の聖母「サンタマリア」とどんな関係にあるのか。単なるその「使者」とは考えられないのだが。その正体は、依然「不明」のままである。

「月」も「赤衣の童子」も時空を自由に交信できる能力を持ち、「オツベル」の家に束縛されている〈白象〉でも二十馬力の怪力を持ち、「山の象」と自由に接触できる「手段」があると思われるのに、なぜ「筆と手紙」を必要としたのか。「紙」という刻印を残すべき「証」が必要としたのは、〈白象〉ではなく、いったい、誰なのか。また、この最も確固たる文字の刻印たる「手紙」という「証」が、「意思疎通」の決定的な誤りを生じさせ、最大不幸に陥る「オツベルの潰し」がなされるのだから、その「手紙」の意味は、あまりに重く、深いと思われる。

5 「語りと主題」の多元的な交錯について（謎㉗㉘㉙）

最初に謎㉗「白象はさびしくわらつて」の理由（何故）について論究していこう。大学の講義でも、多種多様な「意見」が出されたが、以下5点に集約されよう。左記に掲げる

1 「オツベル」の（単純な）死

（一〇三）

2　自分の甘さや弱さから「オツベル」に利用されたため、不幸な結果を招いたこと。（死に対する自己嫌悪）

3　〈白象〉が、結局「オツベル」による「金儲け主義の経済性」の道具だけという観点でしか見られなかったことを理解した悲しみ。（「労働の価値」的観点）

4　「オツベル」に対して「自分の善意」が全く通じなかったこと。[22]（「デクノボー」論的観点）

《さらに、ポジティブな観点として》

5　〈白象〉にとって汗を流し働く労働の喜びを満喫する場所を喪失し、その労働の喜びを味わえなくなった点。（「理想郷」の喪失感か？）

なども考えられるが、〈白象〉の労働自体が、農民の感謝と直接結び付かず、ただ「オツベル」の経済的な搾取の貢献や道具でしかない状況を、どう「意味付ける」のかが問題として残り、他面的な読みからの「再検討」が、必要となろう。

次に、謎㉘「川に入る」㉙「一字不明」について、見ていこう。謎㉙について、様々な研究者が、非常に多くの観点で様々に論じているが、作者（賢治）の明確な「記述」や「文章」が現存しない故に、私は、研究の諸成果を結実させた、『〔新〕校本宮澤賢治全集』第十二巻（一九九五・一一筑摩書房）に依拠したい。この全集自体、評価しない研究者もいるが、私は、この『全集』十二巻所収の『オツベルと象』に従い、論じることにする。では以下の記述に注目したい。

（一〇四）

「ああ、ありがたう。ほんとにぼくは助かつたよ。」
白象はさびしく」わらつてさう云つた。
おや、［一字不明］、川へはいつちやいけないつたら。[23]

ここで、重要な点は、三点ある。

第一点目は最後の一、二行間に空間がない点。この部分では、これ以後の教科書などでは、意図的に一行空けが目立ち、論点を複雑にしている大きな原因だと私は推察する。

第二点目は明らかに［　］の中に文字、記号が挿入し

ている点だ。なぜなら［一字不明］の次にまた「、（読点）」が続いているのだから、そこには何かが入っていることになる。このことについても清水正氏が、詳細に語っていることを参照（清水正『宮沢賢治を解く』鳥影社）しながらも、それは、あくまで「私論」でしかなく、その根拠は、他を充分に納得させるものではなく、「保留」としつつ、論を進めたいと思う。

第三点目は、この箇所は《第五日曜》の延長として記述された点である。したがって、ここは、後で、取り上げるが、「誰」が「誰」に対して「語った」文章（台詞）であるのかという授業実践の方法は、妥当性を持ち、ある程度の解答が得られるはずだ。

「誰が」は、全く不明であっても、「誰に」対してと言えば、明らかに、〈白象〉と捉えるのが、一般的な読み取りとなるが、「論争」が尽きない。

この最後の一行について、前述（注（22））した小倉泰子氏は、「誰が誰に語った言葉なのか」という「発問」で、授業を組立てて、参考にすべき深い「読み取り」の4点を、提示しているので参考にすべきだ。

1　〈牛飼い〉が、「話し」を聞いていた人々に対して「川には入るな」と言っている
2　〈牛飼い〉が、オツベルの家から森に帰る〈白象〉と「山の象」たちに向かって言っている。
3　「山の象」が〈白象〉に対して言っている。
4　「月＝サンタマリア」が〈白象〉に言っている（清水正氏の見解）。

これらの問題は、前述したとおり、最後の一行が、「一行空け」か、又は「連続」かによって、その前文と関わるのか、関わらないのかで、天地の差異が生じる問題である。

［一字不明］の文字以上に、一行の空間をどんな「意図」で改訂・編集されたのかが、最も深刻な問題であると、私は考えるのだが、どうだろうか。

教科書などでは、一行空間が成されているため、最後の一行が、「作品」から超越した存在と考えれば、清水正氏の主張するように、4の「月が〈白象〉に対して」という「読解」も可能となる。後悔に絶望した〈白象〉は、

（一〇五）

「月」であるサンタマリアに導かれ自死しようと試みるが、それを「阻止」し優しく諭す言葉が、その最後の一行と読むことも「許容」されるのではないだろうか。[24]

しかし、ここはあくまで、私は『〔新〕校本宮澤賢治全集』（筑摩書房第十二巻）に拠ることにする。

したがって、一行空けでないが故に〈牛飼い〉の語りの延長線上にあり、その語りかける相手は〈白象〉しかあり得ないという推測から「読み取り」を行うべきであろう。その結論は、私が考えるに、以下のようになる。

陸で暮らす〈白象〉や「山の象」にとっても、「川に入る」ことは、森を離れ人里に進出し、「稲扱小屋に入る」ことと同様に、危険を招くことである。それを察した〈牛飼い〉は、彼の語り自体終了しているのだが、作品の最後に老婆心からか、「死の危険に立ち入る〈川〉を避けて、〈通＝道〉を誤らずに故郷である安全な森に帰りなさい」という「語り部」（賢治）の願いを添えた解釈がなりたつのではないだろうかと考える。いやそう考えたいというのが、私の希望である。[25]

（一〇六）

中学生や高校生は、飛躍せずに、作品の唯一の語り部〈牛飼い〉が、〈白象〉に対する台詞と考え、2の「〈牛飼い〉が〈白象〉や『山の象』に対する忠告」と読み取る例が多い。参考まで。

清水正氏の『宮沢賢治を解く』の著書の中にも、この著書の書く動機として、こんな興味深い「体験談」を挙げている。それは、彼の息子がこの宮沢賢治作品を授業で扱い、宿題として、最後の一行は「誰が誰に語った言葉か」という課題が出された。その宿題をめぐって妻と息子の意見が対立し、大紛糾したという。結局、宮沢賢治研究者である、父の清水正氏の帰宅を待ちわび訊ねようとした逸話である。それぞれの意見の相違、3点をあげるが興味深い。

①〈妻〉「牛飼いが自分の牛に投げかけた言葉」。②〈息子〉「牛飼いが白象に向かって語った言葉」。③〈清水氏〉「月（サンタマリア）が〈白象〉に対して投げかけた言葉」と述べている。

大いなる論争を巻き起こす箇所であり、「謎」は「謎」として依然深い霧の中であろう。

6　まとめに代えて（国語教師になるべき北海学園大学生へ）

今回「『オツベルと象』私論」の1部、2部、3部について論じてきた。この作品は、田中実氏・須貝千里氏編の『文学の力×教材の力』（教育出版）や『文学が教育にできること――「読むことの」の秘鑰――』で数多く論じられてきた論考を元に、今回は、私の実践および、研究書を取り込み「整理」した内容となっている。

この難解な作品を教育出版社の『中学国語』の教科書で取り扱い、各中学校でどんな授業を行ってきたのか、興味深いものがある。北海道の「合同教育研究集会」でも十年前であろうか。中学校の国語の授業で行った授業の実践報告がなされた。詳細な内容は記憶にないが、一つだけ脳裏に刻まれた実践者の声は、こんな意見であった。

「最後の一行は、二つの説があって、謎が深いのですよとある先生に助言を受けました」というのである。

それが、①〈川へ入っちゃいない〉②〈川へは行っちゃいけない〉という二説である。

これも、今迄論じてきたように、原文の正確さに従い、「平仮名」表記でなければ、作者の作品を直に読み取り、味わうことはできないだろうと、私は考える。作品は、作者が世に発表した時点で、作者の手を離れ、様々な「読者」の多様な「読み（位相）」という思考のプリズムによって、すなわち、作品が自由に読み取られ、解釈されるその蓄積が「教材研究」の成果として、国語教育界の財産となり、語り継がれていくべきものだと私は考える。その読みは、当然、歴史の制約や、時代の様々な学説の影響下にあり、常に「正解」はこれしかない、という「正解至上主義」を排し、読み取りの「書き換え」を行うべきものだと思う。そんな論争の一環に私も参加できたことを、この上なき、幸せと考え、筆を置きたい。「多元的謎」という、30もの問題提起「謎」を掲げ、取り扱ったが、本誌上にてどれだけ納得いくべき「論考」を示し得たかは、はなはだ疑問だが、その評価は他者に委ねたい。

しかしながら、どんな作品に対しても「論究」「論争」こそ、次の「実践記録」に繋げる「過程」「バトン」だと考え、最後の言葉としたい。さらに、私が受け持った「教

（一〇七）

育実習実践指導ⅠⅡ」で学んだが北海学園大学の諸君が、教壇に立った時、ほんの少しでも教材研究の糧となり、かつ、その参考資料にと願うばかりである。（完）

注

（1）児童言語研究会編『いま、倫理的思考力が育つ　国語の授業――中学校編――』（一光社２００７年）の中の「２『オツベルと象』（中学一年）」本杉直代（静岡県吉田中学）が執筆した論考を参考。

（2）西田良子「『オツベルと象』の再検討」『日本児童文学』１９７４年６月刊。ここで「近代的資本主義における資本家対労働者」とする見解は、西田良子・宇佐美眞。「地主対小作人」とする見解は、門倉昭治・池上雄三である。

（3）小森陽一『最新宮沢賢治講義』朝日新聞社　１９９６年

（4）池上雄三『オツベルと象』『作品論　宮沢賢治』双文社昭和１９８４年７月刊

（5）田中実／須貝千里編『文学の力×教材の力　中学校編１年』教育出版２００１年

（6）横山信幸「宮沢賢治『オツベルと象』と〈第三項〉」『日本文学』２０１３年８月号。星川哲慈や永井晋の現象学およびウィトゲンシュタインなどを多面的に取り上げ、田中実の〈第三項〉を論じる観点は圧巻。素晴らしい論考である。評価したい。

（7）須貝千里『文学の力×教材の力　中学一年』教育出版。

（5）の前掲載書と同じ。大学の講義では教育出版の教科書を使用したが、その記述が「……ある牛飼いが物語る。」となっており、驚いた。「山の象」の記述では「どいつもみんなきちがひだ。」の一文が、差別用語の配慮から削除されている。要注意。

（8）心象スケッチ『春と修羅』では、「陽ざしとかれくさ」「真空溶媒」「小岩井農場」等多数に「……」が使用される。

（9）「ジャータカ物語」は仏陀が現世に菩薩として修行中、生きとし生けるものを教え導いたエピソードを集めた物語。

（10）清水正『宮沢賢治の神秘――『オツベルの象』をめぐって』鳥影社１９９２年。聖書では、映画『オーメン』で駆使された「６６６」が「大患難」時代の独裁者「獣」を現わす数として有名（黙示13・18）より。この清水氏の著は「キリスト教」の『ヨブ記』やグノーシス主義、『創世記』から論究した「オツベルと象」論。

（11）数についてはミランダ・ランディ著『数の不思議　魔法

（一〇八）

陣・ゼロ・ゲマトリア』創元社２０１０年。また物理学者による、斎藤文一『科学者としての宮沢賢治』（平凡社新書２０１０年）がある。

(12) 清水正『宮沢賢治を読み解く『オツベルと象』の謎』鳥影社　１９９３年。この著は、「仏教」「普賢菩薩」から論究した「オツベルと象」論。(10) の続編となる作者渾身の「論考」である。

(13)「赤」は、このオツベルの「経済性」の部分だけでなく、４の「童子」を着飾る〈赤〉論で詳細に論じるが、参考のため、ここでも叙述する。この作品では七か所象徴的に表現されている。どこまで作者賢治が意図的であったか疑問だが、それは「①（百姓の）真っ赤」「②オツベルの顔のまつ赤」「③赤い張り子の大きな靴」「④オツベルの赤い帽子」そして問題の「⑤赤い竜の目」「⑥赤い着物の童子」「⑦赤衣」である。二つの見解があろう。①②は単なる感情として、残り全てをすべて「悪魔的な意図」とする考え。もう一つが③～⑤を「悪魔的」、⑥⑦は〈白象〉を助け出すための援助者としての「天使的な意図」とする考えである。これについて本稿の第４章で論じる。清水正『宮沢賢治の神秘――『オツベルと象』をめぐって』鳥影社刊より。

(14) 小森陽一『最新宮澤賢治講義』（朝日新聞社１９９６年）。この著では「生産手段の所有者」「再生産されない労働」そして「第一次世界大戦後のインド」という項目で論じている。

(15) 鎌田均「『オツベルと象』――その語りを読む」（『文学が教育にできること――「読むこと」の秘鑰――』教育出版）

(16) 勝悳赤衣菩薩とは、「悳」が「徳」の古字で、「勝徳赤衣菩薩」と同じ。その意味は、「徳に勝る赤衣の菩薩」となろう。この名称には仏に準ずる修行僧となる。赤衣の菩薩と言えば「地蔵菩薩」を連想させ、赤衣の涎かけと重なり、そこに邪悪性はない。

(17) 清水正氏は『宮沢賢治を解く『オツベルと象』の謎』では、「菩薩と修羅」で、隠れキリシタンや遠藤周作の『沈黙』にて関連付けて読み解く案を提示し、これも大変興味深い論考。この著の中で、上田哲氏の《賢治作品へのカトリシズムの投影Ⅱ――「シグナルとシグナレス」・「オツベルと象」の中のサンタマリア》（『宮沢賢治』明治書院）を取り上げている。氏は、『オツベルと象』論の中にキリスト教の文脈で論じた最初で、かつ、唯一の論考と評価している。参考まで。

(18) この論考では、須貝千里氏の［〈「ことば」は伝わらない〉問題を超えられるか――『オツベルと象』の謎――］（教育

（一〇九）

出版『文学の力×教材の力』）で、鋭い「語り」の視点で『オツベルと象』論を展開している。

(19) 清水『宮沢賢治の神秘』（鳥影社１９９２年）。ここで氏は「実は白象自身の内なる他者ではなかっただろうか」と結論付ける。なぜなら、「月」が、突然男言葉で、しかも、かなりぞんざいな言葉で返答しているから、「月」はサンタマリアにあらず。〈白象〉の内面たる他者と論じる。池上雄三氏も「月」と「サンタマリア」は別ものと論じている。『国文学　賢治童話の〈解析〉』（昭和57年2月刊）の中の「オツベルと象」による。この説をより俯瞰的に論じた論考が、横山信幸氏「宮沢賢治「オツベルと象」と第〈三項〉」（『日本文学』２０１３年8月）である。

(20)《第一日曜》《第二日曜》の次に《第五日曜》となっているのは、「オツベル」の偉大さを強調した〈牛飼い〉が、大事件の故に語る気力が萎えてしまい、「聴き手」から無理に催促されたが故に、《第五日曜》でやっと語り、しかもみんなが聞きたい〈白象〉のそこ後ではなく、しっかりと語りをズラし「オツベルかね」という〈牛飼い〉の語りは、要注意である。

(21) 須貝千里「〈『ことば』は伝わらない〉問題をこえられるか」（教育出版『文学の力×教材の力』）で、論じられる、手紙の「意思疎通」のズレについての指摘は鋭い観点であると評価されている。「オツベル」の不幸な死は、言葉が伝わらないという、ソシュールの言語学の視点で捉える「解読」は、この作品の主題に直結するが、「山の象」が誤読するのは、作者の見えざる「意図」を感じ、その「必然性」を読み解くべきと私は、問題提起したい。

(22) 小倉泰子「『オツベルと象』を読む――驚きと発見のある授業……」（『月刊国語教育』２０１０年3月号　東京法令）でも、中学校の国の授業であるが、鋭い「4点」が同様に指摘され、その読みの深さに「感動」を覚える。小倉氏は、中学生に対して、題名、両者の行った行動の差異から、「口実」「嘘」また、「手紙の意志疎通のズレ」など明確に読み取っている。参考にすべき素晴らしい実践の一つであろう。私はあえて5点とした。

(23) 全集十二巻では平仮名記載のため「川にはいつちやいけないつたら」の部分では問題がある。この部分は、「川には行つちやいけない」と「川に入つちやいけない」の二つの意味にとれる。平成八年度版は「入る」「行く」の漢字を当てずに平仮名書きにしている点は「問題あり」と編集者も考慮したためと思われる。

(24) 清水正氏の「読解」説を、ここで紹介する。「オツベル」

を父性の神、「サンタマリア」を母性の神とし、「オツベル」は、〈白象〉に過酷な試練を与え、その試練に耐えきれず、他者救済を求めたが、故に、「オツベル」は死に至った。父性の神である「オツベル」は、当然死ぬことはない。この「試練」に大失敗した〈白象〉は、悔恨のために、母性を求め、川に入って自死（母のもとへ生還）しようとしたのを、「サンタマリア」の母が、その自死の阻止を促した言葉と解読する。これは、地上の王、「オツベル」に代わって、今度は〈白象〉が真の覇者として世界を治めよというメッセージだとする読み。「川」が死に繋がるのは『銀河鉄道の夜』による、ジョバンニの母の言葉に依拠する。「川へはいちゃいけないよ」と諭す。一方、カンパネラは、友人を助けるためにその死に通じる「川」で命を落とすという、故からの解読となるという説。興味は尽きないが、大いなる「仮説」の範疇であろうと私は考える。

(25) この解釈は、牛山恵「『オツベルと象』の研究」（『月刊国語研究』94号38頁）また、山元隆春「『オツベルと象』における対話構造の検討――対話をひらく文学教育のための基礎論」（NII-Electronic Library Service）でも同様に引用しながら指摘している。参考にすべき見解であろう。

（一一一）